

会員投稿

## 花とひと(1) 熊谷市 鈴木英雄

もうかれこれ30年以上も前のことになると思うが、五月晴れの5月のある日、私は友人とともに二人で馬の背のような痩せ尾根を歩いていた。どこか遠くで山鳩が鳴き、うぐいすのさえずりが、遠く、近く、山の静寂を破って聞こえてきた。人影もなく、人の世の物音から隔離されたのどかな春の日だった。尾根の両側は谷間になっていて、ひたすら緑の芽生えが広がり、ひそかに風が通っていた。

ここは上州赤城の山。前夜は友人（当時の本社のある副事業部長）とともに馬電の赤城の山の家で一泊した。当時の山の家の管理人は、現在は菱の実会の会員である高柳さんであったと記憶している。

私どもが歩いていた細い尾根道は、その両側が熊笹でおおわれ、ところどころに樹齢100年は遙かに越えたと思われる白ヤシオツツジの古木が谷間に向かって、まるで盆栽の懸崖造りのように枝を延ばしていた。上州特有の空つ風で、このような姿になってしまったのであろう。このツツジは晩春に、過ぎゆく春を惜しむように枝先一杯に純白のや、筒状の花をつける。

私たちは特に決められた道を歩くというのではなく、ともかく気の向くまゝに、この痩せ尾根を次第に奥へ奥へと辿っていった。やがて両側の熊笹が小径の行方を遮るように蔽うようになり、蜘蛛の巣が張りめぐらされて、人が永く足を踏み入れた形跡が感じられなくなってきた。すこし気味悪く思ったその時、ふと私は尾根の下方の薄暗い谷間に目をやった。谷の遥か下方には灰色の霧が立ち込め、谷底は見ることができなかつた。そして驚いたことには灰色の霧の上には、此処 彼処(ここにこ)と、ピンクの大きな塊りが点々と浮かんでいるではないか。それは夕暮れの庭にぼんぼりが灯つたようでもあった。

もしかすると霧の下には池があって、蓮の花だけが霧の上に浮かんでいるのかも知れない。極楽浄土で見る蓮の花はさぞかしこのような花ではと、その神秘的な光景に私たちはしばし心を打たれ、その場に立ちすくんでしまつた。誇張した表現のようだが、私たちはその時本当にそう思い、感激したのである。やがてその感激は好奇心に変わり、霧で底の見えない谷底に降り、それが何であるのか確かめる決意をした。

谷はほゞ直角に近い急斜面であったが、木の根につかまりながらすこしづつ私たちは谷底に向かって降りて行ったが、思ったより谷は浅く、案外簡単に谷底に到着することができた。そして霧の上に浮かんでいたピンクの蓮の花のようなものは、じつは蓮の花ではなく、シャクナゲの花房(花のかたまり)だけが、あちこちと灰色の濃霧の上に出ていたことが判明した。霧の下には満開のシャクナゲの古木の大群落が存在したのである。そこには今もなお忘れ得ぬ幻想的な光景が広がっていた。(つづく)



会員投稿

## 花とひと(2)

熊谷市 鈴木 英雄

当時、私も友人も植物に関する知識はほとんどなく、目の当たりに見る一面の美しい花がシャクナゲの花であることが、やっと判った程度であった。

ともかくこの衝撃的な経験が私をシャクナゲやその仲間のつつじ類（植物分類上はロードデンドロン属という）のとりこにした原点なのである。それからというものは私は趣味家として、文献をむさぼり読み、先達の話を聞き、原野や仲間の庭で実際にこれらの植物を観察し、知識を深めていった。

赤城の山で遭遇したシャクナゲが標準和名でアズマシャクナゲと呼ばれ、関東や東北南部の山々に自生し、その学名は19世紀の後半に日本の横浜に滞在したフランス政府の役人、デグロンの名に因んでデイグローンエイナムと名付けられたことを知ったのはずっと後の話である。

このような趣味にのめり込んだ私は、原野を歩いてシャクナゲやつつじを観察したり貰い受けたりして、私の家の狭い庭はジャングルと化していった。家内からは洗濯物を干す場所もないと苦情が出始めた。それでもなおやめられず、今度は庭に鉄骨の二階建ての建物を建て、一階はミスト装置を取り付けた繁殖用の温室とし、二階には棚を作って鉢植のものを何百鉢と並べるようになった。

鉄骨の建物の二階に、私が多数の鉢を処狭しと並べたのはまだいい方で、私の東京に住むある知人などは、鉢の置き場所が自宅の庭に見つからず、瓦ぶきの屋根の上一面に棚を置き、毎日の灌水は、忍者のようにいくつかの吊りばしごを使って屋根に登っていました。熱心なアマチュアというものはいろいろ工夫するものである。

ところで私の家の植物も日増しにその数を殖やしていき、ついには面倒を見切れなくなり、枯れるものが始めた。そこで数年前にすべての植物をある植物園へ思い切って寄贈してしまった。この植物園へ行けば、私の植物がすべて見されることを考えて。そして鉄骨の二階建ての建物は、ミスト小屋とともにすべて取りこわしてしまった。

話が長くなってしまうし、本題から少々ずれてしまうけれども、この機会にこの植物園について多少のご紹介をさせていただこう。と言うのはこの植物園は群馬県にあり、それに奇しくも私と友人が神秘的なシャクナゲに遭遇した赤城山の西麓、標高700㍍のところ、37万坪の広大な自然園である。このプロジェクトが始まったのは20年近く前で、シャクナゲを中心とした10年計画のプロジェクトとして発足し、私は乞われて10年ばかり非常勤のアドバイザーをした。元々10年計画のプロジェクトであったが、原種のシャクナゲなど5年や10年ではなかなか成木として見られるものにはならないし、それに37万坪という広大な山地の開発である。すでに想像を絶する莫大な投資もされているが、現時点ではまだその一部が完成したのみで一般に公開するに到っていない。プロジェクトに参画した一人としては、いずれ遠からずその一部でも恒常に一般に公開されることを願っている。  
(つづく)

会員投稿

# 花とひと(3) 熊谷市鈴木英雄

赤城山の西面は不思議に全く水がない。地中をくぐって流れ、麓の赤城村には豊かな水を供給しているものの、この自然園の問題のひとつは水の不足とその補給であった。だが深井戸を掘り、園内に給水できるようになって、10数年前には小さな池を作ることができた。するとたちまちとんぼが集まってきて、その種類は21種を数えたと聞いている。いつだったか孫たちを連れて、園内の野草園に遊んだことがあるが、花の咲き乱れる野草園には無数の蝶が舞い、これこそ花園だと感じたことがあった。地には日本かもしかも時々現れるし、園内の標高の高い奥地には熊も現れるという。さすが自然園である。

いまここに書いている記事の目的は「花とひと」のタイトルが示すように、花とひとが織りなす奇しき人間関係を訴えるのがその意図するところである。そこで自己宣伝の誤解を受けるかも知れないが、私と植物やその花とのかかわり合いをもう少々知っていただくため、私の現在の肩書の一部をここに紹介させていただくことにする。残念ながらいずれも無報酬のボランティアとしての職務であり、それに多忙なことはこの上もない。

#### ◎日本ツツジ・シャクナゲ協会会長

創立後25年、北は北海道から南は沖縄まで、全国に県単位の支部40を数える。会員数1,000名。

#### ◎英國王立園芸協会日本支部理事

その名が示すように王立であり、創立後150年。総裁はエリザベス女王および皇太后。歴代の会長は学士院長、貴族、女王の夫君などの名士が務めてきたが、最近は英國財界の名士が多い。世界最大の園芸団体で会員数は20万人。その日本支部は唯一の海外支部で創立後10年、会員数2,600名。

#### ◎アメリカ ロードデンドロン協会終身名誉会員

つつじ・シャクナゲ関係では世界最大の協会。

#### ◎国際ロードデンドロン協会連盟理事

#### ◎世界各国のロードデンドロン協会会員

#### ◎セシル・スマス植物園(アメリカ)顧問

#### ◎ベリー植物園(アメリカ)顧問

この趣味を通じて私が得た貴重なものは、なんと言っても国内、国外を通じて得た多くの友人であり友情である。この友情を通じて各国の国際会議に何度も日本からの講師として招聘されたし、国内はもちろん国外を旅する数多くの機会も与えられた。(つづく)



1994年2月 英國王立園芸協会(ロンドン)での金メダル受賞式にて

会員投稿

## 花とひと(4)

熊谷市 鈴木 英雄

平成9年度の新しい行事

我田引水のようでお許しをいただきたいが、この間私の国際貢献が認められて、海外での栄誉ある賞を受賞することができた。

1982年にはアメリカのワシントン市で、アメリカロード дендрон協会より、その最高賞であるゴールド・メダル賞を授与され、家内とともに晩さん会および受賞式に参列した。また1994には英国ロンドン市において英国王立園芸協会より、外国人に授与される最高賞であるヴィーチ・メモリアル・ゴールド・メダル賞を受賞(4月号の写真参照:編集委員)、家内とともに晩さん会および受賞式に参列した。これも日本人としては二人目。

1997年(平成9年)5月にはカナダのバンクーバー市において国際会議が開催されるが、私は日本からの講師として家内同伴で招かれており、一週間の会合に参加することになっている。久々に多くの友人に会えることが楽しみである。

その後、カナダやアメリカ各地の友人を尋ね、それぞれの家にホームステイして一ヶ月ばかりの旅を予定しているが、ホテルで宿泊するのは国際会議の会期一週間のみとなる。これも皆多くの友人のおかげである。過去には、広大なアメリカをいろいろな友人にリレーしてもらい、広範囲に渡って車で旅したことあった。

いつだったかある知人とともに北欧の旅をしたことがあったが、デンマークの空港でも、スウェーデンの空港でも到着すると、必ず私の友人が出迎えているので、同行の知人を驚かせたことがあった。これも趣味のおかげである。

また日本のある大学の教授で私と同じ趣味の仲間が、海外出張をすることになり、目的地の外にその周辺の国を訪ねたいということになって、現地の大学の学長の招聘状をもらってやったこと也有った。これも趣味の友人である現地の大学の友人の教授を通じて、私が手配したことである。

私は満70歳まで長年に渡ってサラリーマンとして働き、仕事を通じて多くの同僚や知己を得た。これらの人びとと久びさに会って話をするのもまた楽しいことである。だが夜を徹して話が弾むことはまずあり得ない。アルコールをたしなむ人びとがアルコールをだしにして“飲み明かす”ということはあるかも知れないが、それはまた別の話である。

(つづく)



会員投稿

## 花とひと(5:最終回)

「秋の親睦旅行」お知らせ第1弾!

熊谷市 鈴木 英雄

ところが趣味の仲間というものは面白いもの。長年の知己でなくとも話が弾み、夜半や、夜を徹することは日常茶飯事である。

私が会長をしている「日本ツツジ・シャクナゲ協会」では、たびたび各地で一泊程度のイベントを行ったり、大会を開催したり、理事会を持ったりする。当然のことながら総会も実施する。

その夜は早くから就寝する人はごく僅かで、大抵の人々は三三五五と集って、趣味の植物の話に花が咲き、夜半まで話が続くか、夜をほとんど徹することになる。温泉旅館に宿泊しても私など温泉につかったことはほとんど記憶はない。熱心な趣味の愛好家というものは大抵このようなものである。

国内は元より、海外の友人との交友談を書いているときりがない。これもまた趣味のお蔭であり、物質的には貧乏暇なしの日常ではあるが、心豊かな人生を趣味を通じて送ることができるのを私は本当に幸せに思っている。花を愛(め)で、花を通じての“ひと”との絆(きずな)はまことに不思議なものである。聖書に“与えよ。然らば与えられん”という言葉がある。その逆もあるかも知れない。趣味を通じて、その知識を交換し、それによって友情を分かち合うこともまた楽しからずやである。(おわり)



英国の  
友人宅  
での鈴  
木夫妻

5回にわたって掲載した鈴木英雄さんの「花とひと」は、今回で終了しました。じつは鈴木さんからは原稿29枚にわたって書いていただきましたが、実際に掲載したのは6枚分くらいだったでしょうか。そのため、いろいろな楽しいエピソードなどのほとんどを割愛してしまい、申し訳けありませんでした。いつの日か何らかの方法で全部を発表できたらなと思いますが…。  
(編集委員会)